



ボートレースダービー 最古のSGを 児島で初の開催!!



少し気の早い話だがSGの第66回ボートレースダービー（全日本選手権）は、10月22日からボートレース児島で開催される。その出場選考期間は今月いっぱい、8月上旬には出場予定レーサーも発表され、いよいよ開催に向けての機運も高まってくるはずだ。ここではダービーというSGレースについて、改めてその位置づけや歴史などを確認していこう。



66th ボートレースダービー
BOAT RACE DERBY
10/22 TUE 23 WED 24 THU 25 FRI 26 SAT 27 SUN

ボーダー勝率は 7・15前後

ボートレースダー

ビー出場の基準は、優先出場を除けば選考期間1年間の勝率上位。A1級であることと、期間中の出走回数160走以上も要件となつていゝる。6月下旬における今大会のボーダー勝率は7・15前後で、昨年大会の7・

21をやや下回つてはいるものの、極めて高いレベルの戦いであることは間違いない。

この7月から適用されたばかりの19年後期勝率で勝率7・15はちょうど全体60位となる。集計期間が異なるとはいえ、レーサーを實力順に並べれば大体50位〜60位が勝率7・15前後に

なるということでもあるだろう。そんな實力上位レーサーたちが相まみえるのがダービーなのだ。

SGの選出基準はさまざま。ただ、シンプルな實力主義で出場選手を決定するSGは実は少ない。ファン投票だったりレース場の推薦、あるいは特定のレースへの出走がないと選出の資格も得られない

かったりする。賞金や優勝回数で決めるSGもあるが、それとて若干の運に左右されることは否めない。その点、ダービーは選手の級別を決める指標にもなる勝率が基準。シンプルで分かりやすく、だからこそ「ダービーは別格」というレーサーも多いのだろう。

ファンもダービー

で優勝した選手をダービー王として称える。やはり観る側にとっても、ダービーは特別、というイメージがある証だろう。

もっとも古いSGレース

ダービーが特別なSGと感じられるのは、その歴史の長さも関係しているはずだ。あらためて記す

までもないかもしれないが、ボートレースダービーは最も古いSGレースだ。最初に開催されたのは1953年11月。ボートレースそのものの初開催が52年4月だったので、それからわずか1年半あまりで最初の大会が開かれたことになる。ダービーはボートレースと共に歩んできたSG、という



ダービー選出順位で6月下旬現在、トップを争う
峰竜太と2位の桐生順平

こともできようか。

ダービーの次に歴

していることがわか
る。

史のあるSGはメモ
リアルで、55年8
月が初開催。ちなみ
に他のSGは、クラ
シックが66年、オ
ールスター74年、
グランプリ86年、
グラチャン91年、
オーシャンCが96
年、チャレンジCが
98年。ダービーと
メモリアルは、抜き
んで長い歴史を有

左表は第1回から
のダービー優勝者
だ。第1回大会は4
日間制で行われ、優
勝戦は8艇立て。優
勝した友永慶近選手
の登録番号は52だ
った。このころ、ま
だ生まれたばかりの
ボートレースはもの
すごい勢いで選手を
増やしており、52
年の3月に第1号選

ポートレースダービー 歴代優勝者と開催レース場

回	優勝戦日	レース場	登録番号	レーサー名	現住所
第1回	1953年11月10日	若松	52	友永 慶近	長崎
第2回	1954年11月30日	徳山	247	松尾 勝	福岡
第3回	1955年11月23日	福岡	308	村田 吉広	滋賀
第4回	1956年11月5日	浜名湖	177	中西 勉	香川
第5回	1958年8月6日	江戸川	13	三津川 要	滋賀
第6回	1959年11月25日	福岡	1216	深川 功	東京
第7回	1960年11月13日	若松	370	草川 祐馬	大阪
第8回	1961年8月6日	住之江	318	倉田 栄一	三重
第9回	1962年11月6日	平和島	483	長谷部義一	和歌山
第10回	1963年11月5日	住之江	284	歌谷 博	香川
第11回	1964年7月20日	平和島	1481	北原 友次	岡山
第12回	1965年9月7日	住之江	1284	長瀬 忠義	広島
第13回	1966年9月6日	住之江	1126	芹田 信吉	福岡
第14回	1967年10月10日	尼崎		不成立	
第15回	1969年3月5日	平和島	1435	金子 安雄	埼玉
第16回	1969年12月11日	住之江	1264	早川 行男	静岡
第17回	1970年10月6日	住之江	268	中野 信次	福岡
第18回	1971年10月5日	住之江	1303	鈴木 一義	東京
第19回	1972年10月10日	住之江	1435	金子 安雄	埼玉
第20回	1973年10月10日	住之江	1481	北原 友次	岡山
第21回	1974年10月8日	住之江	2291	野中 和夫	大阪
第22回	1975年10月12日	住之江	2260	林 通	岡山
第23回	1976年10月12日	蒲郡	2291	野中 和夫	大阪
第24回	1977年10月11日	福岡	1738	松本 進	愛知
第25回	1978年10月10日	住之江	2444	松田 慎司	広島
第26回	1979年11月5日	福岡	2108	八尋 信夫	福岡
第27回	1980年10月14日	唐津	2288	吉田 重義	大阪
第28回	1981年11月3日	浜名湖	2073	村上 一行	岡山
第29回	1982年10月12日	桐生	2079	安部 邦男	群馬
第30回	1983年10月12日	平和島	2260	林 通	岡山
第31回	1984年10月12日	住之江	2606	半田 幸男	広島
第32回	1985年10月29日	福岡	1515	彦坂 郁雄	千葉
第33回	1986年10月14日	桐生	2510	嶋岡 孝	三重
第34回	1987年10月13日	平和島	2992	今村 豊	山口
第35回	1988年10月12日	多摩川	2992	今村 豊	山口
第36回	1989年10月13日	住之江	1950	瀬古 修	三重
第37回	1990年10月11日	戸田	2992	今村 豊	山口
第38回	1991年10月14日	尼崎	2273	原田 順一	福岡
第39回	1992年10月12日	平和島	3422	服部 幸男	静岡
第40回	1993年10月12日	戸田	1812	長嶺 豊	大阪
第41回	1994年10月12日	常滑	3285	植木 通彦	福岡
第42回	1995年10月10日	丸亀	1864	安岐 真人	香川
第43回	1996年10月10日	福岡	3307	上瀧 和則	佐賀
第44回	1997年10月12日	唐津	3622	山崎 智也	群馬
第45回	1998年10月11日	福岡	3590	濱野谷憲吾	東京
第46回	1999年10月11日	戸田	3070	山室 展弘	岡山
第47回	2000年10月9日	戸田	3245	池上 裕次	埼玉
第48回	2001年10月28日	常滑	3381	滝沢 芳行	埼玉
第49回	2002年11月4日	平和島	3779	原田 幸哉	愛知
第50回	2003年11月3日	戸田	3622	山崎 智也	群馬
第51回	2004年10月31日	福岡	3257	田頭 実	福岡
第52回	2005年10月30日	津	3557	太田 和美	奈良
第53回	2006年10月29日	福岡	3780	魚谷 智之	兵庫
第54回	2007年10月8日	平和島	3517	高橋 勲	神奈川
第55回	2008年10月13日	丸亀	4042	丸岡 正典	奈良
第56回	2009年10月13日	尼崎	3415	松井 繁	大阪
第57回	2010年10月11日	桐生	3783	瓜生 正義	福岡
第58回	2011年10月10日	平和島	3941	池田 浩二	愛知
第59回	2012年10月28日	福岡	4042	丸岡 正典	奈良
第60回	2013年10月21日	平和島	3783	瓜生 正義	東京
第61回	2014年10月20日	常滑	3554	仲口 博崇	愛知
第62回	2015年10月25日	浜名湖	3721	守田 俊介	滋賀
第63回	2016年10月30日	福岡	3783	瓜生 正義	福岡
第64回	2017年10月29日	平和島	3623	深川 真二	佐賀
第65回	2018年10月28日	蒲郡	3721	守田 俊介	滋賀

※現住所欄は第61回大会以降、支部を表記

手が生まれてから第1回ダービー直前の53年9月までに、登番845までの選手が登録されている。つまり友永選手は選手835人（登

番10までは欠番）の頂点に立ったわけだ。登番52が示すように、少しばかり経験が長かったことが優勝の要になったか。

第1回大会の入場者数は2万7千人あまり、売上は約5500万円だったという記録が残っている。

岡山から5人の ダービー王

ところで現在のグレード制が導入されたのは88年のことで、SGという呼称が使われるようになったのもそれからだ。それ以前のSGは、4大特別競走、あるいは5大特別競走などと呼ばれていた。現在、優勝戦の3位までにメダルが贈られるSGをGR

AND E5と称しているのは、この名残といってもいいだろう。

さて、これだけ長い歴史を誇るレースであれば、過去にボートレース児島でも開催されているのではないか、と思うかもしれない。しかし実は意外なことに児島で行われるのは今回が初めてのことになる。付け加えれば、

中国地区のボートレース場での開催も第2回大会以来のことだ。

というのも、ダービーは歴史が古いだけに、当初はやはり多くの入場者が見込まれる大都市圏での開催が多かったからだ。児島を含めて、これまで開催実績のないレース場は8つもある。

一方で児島はダー

ビーと無縁というわけではなかった。地元岡山支部のレーサーでは、あの最多勝レーサー北原友次が2回の優勝を果たしたのをはじめ、5人のレーサーで延べ6回の優勝を記録している。地元のファンからすれば、やっとダービーが来る、といった気持ちもあるのではないか。

ボートレース児島では、昨年、新しい入場門を整備したほか、レース場に来場するファンを大切に
する姿勢をアピールしている。ついに同場で開催されるダービーは、ぜひ現場で観戦したいところ。

* * *

出場選手の選考期間には残すところ20日程度。来月号では、出場が決まったレー

サーたちについて触れる予定だ。



第64回大会優勝は深川真二、第63回大会は瓜生正義

前回大会優勝戦

第65回大会の優勝戦は、ケガによる5か月間の戦線離脱から復帰したばかりの篠崎元志、48歳6か月という歴代2位の年長SG初優出を果たした石川真二など、注目の顔ぶれとなった。最後は予選トップ、1号艇の守田俊介がトップスタートから万全の逃げ。第62回大会以来の2度目のダービー王となった。

